

第34回区民車座集会意見交換内容（宮前区）

- 1 開催日時 平成30年2月18日（日） 午前10時から午前11時35分まで
- 2 場 所 川崎市富士見台小学校 図書室
- 3 参加者等 参加者16名、オブザーバー10名傍聴者7名 合計33名

<開会>

司会：それでは、皆様、お待たせいたしました。定刻となりましたので、ただいまから第34回区民車座集会を始めさせていただきます。

私は、本日の司会を務めさせていただきます、宮前区役所企画課の古泉と申します。よろしくお願いいたします。

本日の車座集会は、「家庭人・仕事人・地域人として考えるみやまへの未来」というテーマで開催いたします。本日の参加者は、20代から40代の若い世代の皆さんとなっております。日ごろ、子育てや仕事でお忙しい皆さんだと思いますが、今日は、同じまちに住む地域人として、住み続けたいふるさと宮前区について語り合える場となればと思います。

なお、本日はオブザーバーとして町会の方にも10名ほどおいでいただいておりますので、どうぞよろしくをお願いいたします。

それでは、行政からの出席者を紹介いたします。

福田紀彦川崎市長でございます。

市長：どうぞよろしくお願いいたします。

司会：小田嶋満宮前区長でございます。

区長：よろしくお願いいたします。

司会：それでは、福田市長から一言、御挨拶を申し上げます。

市長、お願いいたします。

<市長挨拶>

市長：皆さん改めまして、おはようございます。

区民車座集会に御参加をいただきまして、まことにありがとうございました。今日は、場所も、いつもはいろんな区役所の会議室とかで行っているんですが、趣向を変えて富士見台小学校の図書室をお借りしました。地域資源、この図書館の中でもですね、いつもボランティアの皆さんが100名近く御登録をいただいて、いろんな形で読み聞かせだとか図書の整理だとか、御協力をいただいているということで、こういった学校の中にも地域の人たちが、いろんな方がかかわっていただいている、そういう場所でもあります。

今日は、町会の役員の方、町会長の皆さんに、10名ほど来ていただいておりますが、実は町会には、行政からものすごい、いろんなお願いをさせていただいているのを皆さんご存じでしょうか。それこそ、市政だよりをお配りしていただいたり、防災の避難所運営をどうやってやるかというのを町会にお願いしたり、あるいは子どもの登下校の見守りをやっていただいているところもあたりとか、あるいは地域の福祉をやっていただいているところで、例えば民生委員を町会で御推薦いただけませんかとか、何かというと町会の皆さんに地域のことをお願いしている部分というのは、また担っていただいている部分があるんですけど

も、ここも非常になかなか課題が多いんです。全市的に見るとやっぱり、まだ宮前は加入率高いほうかと思えますけど、7割ちょっと切ってるぐらいですかね。ただ、町会の加入率もだんだん下がってきて、担っていただいている役員の人たちも何となく高齢化が進んできていると。若い人たちにもっと地域のことを関心を持っていただいて、もっと加わっていただきたいというふうに思っているんだけど、なかなかそこが難しい面というふうなのが、これはもう全市で、あるいは全国で同じことが起こっています。

宮前で、冒頭で余り長くなってはいけませんけど、宮前区はとにかく若い人たちに選んでいただいて、ここに住んでいただいている方が非常に多い。特に20代の方が、結婚して初めて住むところが宮前区という方がすごく多くて、人口が非常に伸びているし、年少人口も非常に多いという、全国でもものすごく珍しい地域です。こういったところで、若い人たちがいろんな世代の人たちとまじり合いながら、やっぱりここに住んでよかったな、住み続けたいなと思うまちに、いい循環をまわしていくためにはどうしたらいいのかということを、今日は若い世代の皆さんにお集まりをいただいて、いろんないいディスカッションができればというふうに思っております。

今日は有意義なディスカッションができますこと、よろしく願いいたします。

ありがとうございました。

<アンケート結果の紹介>

司会：ありがとうございました。

それでは、早速進めてまいります。意見交換に入ります前に、事前に参加者の皆様に御記入いただいたアンケートの結果について、簡単に御紹介したいと思います。

お手元の、ホチキス止めの資料を御覧ください。

こちら、皆様にまず、宮前のまちの好きなところってどこですかということでお伺いしました。そうすると、住宅街と自然が共存して雰囲気がいいところというふうに答えてくださった方が一番たくさんいらっしゃいました。ほかに、治安もいいし、安全・安心に暮らせるですとか、都心に近く、通勤に便利だというようなお話もありました。

あとは、地域のつながりがあるところがいいよという方もいらっしゃいました。地域が好きで、盛り上げたいという人が多いんじゃないかなということでした。

次に移ります。次のページおめくりください。次に、もっとこうだったらいいと思うところはありますかということでお伺いしました。そうすると、設備や施設に充実をというお声もありましたが、もっと地域の交流を深めていきたいんだというようなお声もたくさんいただきました。例えば、自治組織や伝統芸能に参画しやすければいいなですとか、区内で商業、ビジネスがもっと回る環境があればいいなですとか、あと既にあるものやサービスを生かす仕組みを大事にしていけたらいいんじゃないかなというようなお話がありました。

次、おめくりください。それでは住み続けたい宮前区にもっていくためには、皆でどんなことができるでしょうかということでお伺いしました。そうすると、まず地域自体の魅力を開発し、維持していくことが大事なんじゃないか、例えばまちの人たちが楽しく参画できる行事をつくったり、地域のお祭りに子どもが気軽に参加できる居場所づくりをしたり、コミュニケーションがもっと密になると住み続けたいし、つながりたいという気になるよねというふうな御回答がございました。

この次のページ、おめくりください。今コミュニケーションの話ができましたけれども、この住み続けたいというところでは、頼りになる地元の人が見つかって、人のつながりが網目のように広がっていく、そんなまちだといいいよねというような話がありました。

具体的な御提案も幾つかございまして、ワーキングママの交流するような機会があればいいですとか、お父さん同士親睦を図る場をもっともつつくっていききたいよねということですかとか、あとは新住民、新しく

来た方へのウェルカム感がほしいな、なんて声もございました。弱者支援の枠組みは、一人ひとりがしっかり支えていくことが大事だよ、というようなお話もございました。

これすごくいい言葉だなと思ったんですけども、子どもたちが地元、ここが自分の地元だよと胸を張って言えるような地域にしたいというようなお声もありました。

1ページおめぐりください。実は、地域の魅力づくりや人のつながりに関する区民意見というのはいろんな機会でもいただいております。例えばこちら、参考でつけさせていただいたのは、平成26年に、川崎市の総合計画を策定するときに宮前区で行ったワークショップで出た意見です。10年後、こんなまちにしたいねというところで、例えばお祭りや風習など地域にある伝統が継承されているですか、小さなコミュニティをつなぐイベントがたくさんあるですか、若い世代が地域コミュニティに参加しやすい場ができていて、子どもと高齢者のつながりがある、引っ越し等で外から来た人もほっとできる空気を感じられる。このような意見がありました。

やっぱり、皆つながりですか、ほっとできるまちをつくっていききたいというような意見が、やはり皆様と同じように皆思っているんだなというところが出てきたのかなというふうに思います。

それでは、ただいま御紹介したアンケートの内容を踏まえながら、住み続けたいふるさと、宮前区に向けて、本日お集まりの皆様と意見交換を行っていききたいと思います。

皆様、今お椅子にお座りになっていただいておりますけれども、御意見を発表される場合は、そのままお座りになったままで結構です。本日たくさんの方に御参加いただいておりますので、発言は3分ぐらいを目安に、簡単にまとめて発表していただければというふうに思います。よろしく願いいたします。

それでは、ここからは進行を市長にお願いしたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

<意見交換>

市長：それではよろしくお願いいたします。

今御紹介あったようにいろんなアンケートをやって、大体同じ意見が出てくるんですね。この、人とのつながりが網目のように広がると。いろんな世代がくっ付き合ってくるとか、地域の中でいい、この循環ができればいいとか、ネットワークができればいいなって皆おっしゃるんですね。皆おっしゃるんだけど、果たしてそれが本当にできているかという、ややその理想と現実というのはちょっとずれてきているのかなというふうに思っています。

先ほど申し上げたように、どういうふうにかかわればいいのかというふうなのが、思っていることと自分の行動に必ずしもつながっているかという、なかなか全体としては、やっつけている方はすごくやっつけていただいているんです。ですから、私が知っている方々でも若い世代で非常に積極的にいろんなことにかかわっていただいて、いろんな組織とつながっている方もいれば、いや全くつながっていない方もいらっしゃる。でもそれではちょっともったいないなと、自分のまち、ふるさとというふうには呼べるためには、この住んでいるということ以上にですね、もうちょっといえば暮らしているということです。ただ住んでいるということじゃなくて、つながって何かここにいろんなことが生まれているんだという、暮らすというものにしていかなくちゃいけないんじゃないかなというふうに思っています。そういう意味で、今日は先ほど申し上げたように、皆さんから知恵を貸していただきたいというふうに思っていて、知恵を貸していただくと同時に、どうやって多くの人たちを巻き込んでいけるだろうかと、私たちも一生懸命行政としても考えていることは考えているんです。でも、非常に危機感を持ってまして、これだけ新しい人が増えてきている。でも、そこで例えば子育てに不安を持っている方々がですね、友達もいない、私の友達にもいます。新しく宮前区に住んできました、だけど友達いません、一人で子育てに悩んでいる。何とか行政もサポートしますが、それ以外の場がもうちょっとあったらいいなとかいうこと、いろんなことを思うことがあります。

これは子育てに限らず、高齢者も、いきなりというか、介護必要になっちゃった、あるいはちょっと前の段階だけれども、もう少し地域のきずながあればなという形で、先ほど申し上げた民生委員の方だとか、いろんな形でケアしてくれていますけど、もう少し日常的に、本当に助けが必要になってからということじゃなくて、地域のつながりがあれば、あの人大丈夫かなという、支え合っている状態というふうなのをどうやってつくりだしていくかというようなことにですね、皆が知恵を出し合っていかなきゃいけないし、そして皆で行動していくということにしていかなければならないと思うんです。

今日は、アンケートの中から今発表いただきましたけれども、何ができるかという、5ページのアンケートのところに、幾つか御意見をいただいているということで、列記されておりますけれども、まず一つワーキングマザーの交流や若いママのメンター制度をつくるという御意見をいただいたのはどなたでしょうか。松尾さん。松尾さんから、ちょっとこのことについて御発言をまずいただいてもいいですか。

松尾さん：宮崎に住んでいます松尾と申します。よろしく申し上げます。私自身が、仕事人、家庭人としては何とか頑張っているんですけど、地域人として全く何もやっていないという状況で、このタイトルを見て、何かやれることのきっかけをつかめればと思って今日参加しました。

ワーキングマザーというところでいくと、私自身は20年働いていて、この土地にずっと小学校のときから住んでいるんですけども、なかなかワーキングマザーの比率が低くて、企画とかコミュニティも、働いているとなかなかきっかけがつかめなかったりとかいうところはあります。

現実、保育園のときの友達に聞くと、やっぱり相談する人がいないとか、ただ、いても学区が一緒だと相談ができないとか、そんなこともあるので、そういうしがらみを越えた、例えば食育、土曜日と日曜日に食育のプログラムを組んでいただいて、そういうところで緩く浅いコミュニティをつくるとか、あとは会社でも今、ナナメンターといって、同じ組織じゃない中でメンター制度をつくったりとかいうのもあるので、私は40代で、若いママの例えばメンター、川崎市の中で、宮前区の中で、そういう仕組みとかがあればぜひ、これに参加したいなというふうなことを思っております。

市長：ありがとうございます。

松尾さん、ちなみに地域の単位って、自分が行動できるとか、身近だなと思える範囲はどのぐらいですかね。

松尾さん：やはり宮前区、まず川崎ということに、ずっと私も地元といたくても言えないというか、なかなか川崎というと川崎、どことか、イメージがあつてというところもあつたりして、なのでそういう意味では川崎全体なんですけど、これは自分が行動できたり意識を変えていくというところでは宮前区の宮崎とか宮前平とか、本当にアクセスで歩いていけるようなところだったら、もうどこでも私たちは一緒の仲間だなと思います。

市長：ありがとうございます。

今、地域の概念ってどのぐらいでしょうかという御質問したときに、宮前平とか宮崎とかって、そういうぐらいの単位だと、何となく実感があるという、そういうふうに思われる方、どのぐらいいらっしゃるでしょうか。

大体そのぐらい。もう、ほとんど8割ぐらいそう思っているんじゃないですかね。ですから、実は宮前区よりはもっと小さい単位のほうが地元感があるというか、そういう感じでしょうか。このことについて何か御意見ある方いらっしゃいますか。

小泉さん、手挙げてなかったですね。小泉さん、俺はもうちょっとでかいぞって感じですか。

小泉さん：何となく、僕は40年間ぐらいこの宮前区にずっと住んでいるんですけども、やっぱり、家が農業という、畑をやっていると、その宮前区の中での畑をやっているメンバーの集まりがあって、今度はそこに、川崎市内の農家の集まりみたいなものがあるって、その陣地じゃないけど、宮前区から出れないとか思っちゃうんだったらそれはもったいないかなと。地元というのであれば、川崎はもちろん地元だと思いますしね。この関東というのはもちろん地元で、今オリンピックだと日本はもちろん地元みたいなことになっていくので、その出れる出れないという範囲があるんで、僕の中でここら辺までが出やすい範囲というのはもちろんありますけど、アンテナを張ったりとか、興味があるものに参画とかね、参加する場合であれば、それというのは、いかように広げてもそれを狭めてもいいものではないかなと。

市長：なるほど、ありがとうございます。

実は、町内会のアンケートだとか、市民アンケートをとっても、松尾さんのおっしゃったぐらいの、大体町内会ぐらい、あるいは小学校区ぐらいというふうな、そういうのが大体ほとんどなんですよね、意識として。もちろん、おもしろいデータ、今日やっぱそうかなと思ったんですけども、宮前区の人たちがどこに転入、転出しているかというふうな話なんですけど、一番多いのが、なんと高津区。これはちょっとびっくりしました。去年のベースだと、1,500人ぐらい高津区から入ってきて、約1,000名ぐらいが高津区へ転出していくというふうな形で、これは圧倒的に多いということで、もともと宮前区ができる前は、同じ高津区、一つの区でしたから、何となく高津区隣組というか、同じ田園都市線圏内でバスでも非常にあるから地元感があると。ですから、安心した地元感同士のところで転入し転出しているというのが一番多いというのは結構なるほど。隣合っている麻生区、ここはほとんどランキングに入ってきていません。というのはやっぱり、電車だとかバスとかの交通網、だからよりちょっと、距離感は近いんだけど、実際には意識としてはあんまりイメージ湧かないなというところなんだと思うんですけども、そういった意味で、非常に自分たちの生活範囲って意外と思っているより狭くて、学校単位であったり町会の単位であったりと、そういうところで皆ほとんどが暮らしのものが完結していて、そこのところをよりよく充実させていくことというのが暮らししていくという意味で、ものすごく大事なんだというふうに思います。

佐藤さん、今の聞いていてどういうふうにお感じになっておりますか。

佐藤さん：高津区というのはまさに、僕はしょっちゅう散歩をしているんですけども、高津って歩いているといつの間にか高津区に入っちゃっているぐらい近いですし、僕宮崎台が最寄り駅なんですけれども、梶が谷隣駅なので、もう本当に確かにそのとおりでなと。何か、地元感でいうと、高津というのはまさに、生活圏に入ってくるんですよ。さっき小泉さんがおっしゃっていた、大きく広げれば日本も地元だって、まさにそれはそのとおりでななんですけれども、地元って、でも、僕の場合は生活圏、それこそ散歩で行けたりとか、ちょっと買い物で行けたりとかという単位でどうしてもとらえているので、そうするとやっぱり、それこそ高津含めて、梶ヶ谷なんかも含めた、僕はその馬絹なので、逆に宮前区内でも、この間僕、稗原のほうであったイベントに、似顔絵描きで参加したんですけども、やっぱり歩きで1時間10分くらいかかるんですね。そうなるって生活圏とはちょっと思えないというか、そういう感覚はあるので、やっぱりそうですね、歩いて頑張っていけるかどうかぐらいが地元感覚の基準になるのかなという感じはしております。

市長：やっぱり歩けるといってその範囲だと思うんですね。松尾さんの御提案があったように、子育ての悩みだとか、そういったところをお互いに支え合っというか、悩みも相談できて、メンター制度みたいなものがある中で言えば、あんまり遠いところではなくて、近くの、できれば歩いて行ける範囲のところにお仲間だったりというのがいるというふうなのが一番いいよねということですよ。

山本さんは、こども文化センターとかでボランティア、子ども会なんかでもボランティアをやっていただいていると聞きましたけれども、今のお話に関連して何かコメントいただけますか。

山本さん：最寄り宮崎台で、出身は千葉県なんですけれども、仕事の都合で2年半前から宮崎台に住んでいます。

私の中で、まだ宮崎台、地元とまで思えていなくて、正直、馬絹とかそういう地名とかも全然わからない状態です。宮崎台駅周辺と、家の往復しかこの2年半してきていない状況でした。

それで、子どもにずっと興味があったので、家の目の前に実は児童館があるということに2年後くらいに気づきまして、ちょっと区役所とかに電話をしてボランティア登録できないかということによって、そこかいろいろ地域の輪が広がって行って、今日も宮前平のお花屋さんの加藤さんと今知り合っているんですけども、そういったところからこういう会の紹介をいただいたりとか、少しずつ点がつながって行って輪が広がって行って、地域を知り始めたというぐらいの状況で、ただその広がりとともに、私は中で宮前に対する愛着というか、そういうものが少しずつ、新参者なんですけれども芽生え始めているような、そんな状況です。

市長：うれしいですね。全く新しい形のかかわり方というか、そんなに遠くのことにはよくわかってなかったけれども、子どもに興味があって、目の前の児童館のところから関係の広がりが出てきたと。これはすばらしい展開の仕方だったんですけど、それこそ地名の馬絹がわからないけれども、でもそこから何となく歩いている範囲の地元の児童館だとか子供会だとかという形にボランティアに入って行って、いろんな形に入る。今御紹介いただいた加藤さん、お声掛けしていただいたんですか。すごく、こういう方が増えていくとですね、ものすごくどんどん広がっていく、ある意味もう既にキーマンになっておられると思うんですけども。ちょっと加藤さんの取り組み方、地域での。

加藤さん：ふだんは宮前平で花屋を営業しております。今日は、何か近くで発表会があるのでお花のオーダーがたくさんあるんですけど、お花少なくなっちゃったのでちょっといたらまずいなと思ひまして、来てみました。

市長：ありがとうございます。

加藤さん：あとは、特に地域に何かという活動をしているというわけではないんですけど、僕の娘も今年から小学校にあがっていろいろとこども110番とか、地域の子ども会さんが主催しているイベントとかあったりするんですけど、もっと大人と子どもの距離感が近づくような感じの催しだとか、子どもが安心して大人に挨拶ができるような感じのことができるといいなと思って、何となく地域の、うちの近所のお店やさんと協力して、ちょっと何かこんなことやってみませんか、お店の方も若い方が多くなってきたので、軽く何か取り決めをすとか、打ち合わせをしようとかということではなく、いい意味で、ノリでスタートして、一応ゴールをここにしようということで決めてやったりはするので、真面目に地域のことを考えてやっているということではないので、もう振らないでください。

市長：実は加藤さん、お花屋さんで、かつおもしろいブーケをつくっておられて、野菜のブーケをつくっておられてですね。

加藤さん：営業になっちゃいますが。

市長：すごくいいなと思って、一昨年ですか、川崎市の市政だよりの正月号のところにですね、御覧になりました、加藤さんの野菜ブーケ、あれ提供したのは小泉さんのお野菜じゃない。

小泉さん：高津区です。

市長：変なところで出ちゃった。

でも、こうやって川崎市の野菜をこういうブーケにさせていただいて、広めていくというのも、これもまた川崎の魅力を発信させていただいて、人をつなげていただいている取り組みで、ものすごく今人も野菜もいろんな形でつないでいただいているなというふうに思わせていただきました。

加藤さん：ありがとうございます。

市長：ありがとうございます。

こういう活動が、非常に加藤さんのところの若い世代の人たちがいろんな形でくつつくというのがあるんですが、さらに加藤さん、もう1回振っちゃいますけど、さらに上の世代に、交流をしていくというふうなので、実は寺子屋、この富士見台でも寺子屋活動が始まっていますけども、子どもたちにアンケートをとりますと、一番うれしいといっている結果、87%の子どもたちがですね、親や先生以外の大人と会話ができたということが最もうれしいというふうに答えているんですね。そこを教えていただいている世代の人たちというのは、まさにおじいちゃんおばあちゃん世代の人たちが結構な割合で占めていると。こういうふうに仕掛けというのは、多世代交流をつくっていくという一つの仕掛けではあるんですけども、加藤さんの取り組みから、もう少し多世代にとかというふうな形にするにはどうしたらいいですかね。今日はちょっとお知恵拝借の区民車座なんで。

加藤さん：あとでメールしてもいいですか。

市長：できればこの場で披露していただけると。

加藤さん：この寺子屋の、ちょっと簡単に記事を見たくらいなんですけど、どうなのかは僕もよくわからないんですけども、確かに住んでらっしゃる方は僕らみたいな小さい子がいる御家庭から、それこそ僕らが孫にいるような感じの諸先輩方の住んでいらっしゃるとい、お祭りとか、そういうのに行くとやっぱり先輩方が運営していらっしゃる。なかなか僕ら世代が入り込めないところもあったりすると思うので、そういう地域事につながりが持てればうまく間がとれていけるんじゃないかなと思うんですね。

市長：なるほど。お祭りとか自治会町内会の皆さんが運営していらっしゃるところに何となく入りづらい感はあるということですか、

加藤さん：入りづらい。僕はこんななので適当に入っていけるんですけど、やっぱりちゃんと仕事してらっしゃる方とかはどういうふうに声掛けしたらいいだろうか、悩むところがあるのかなと思います。

市長：なるほど。

ちょっとうなずいている方のお顔が幾つか、ちょっといいですか。

鎌谷さん：ありがとうございます。鎌谷といいます。

先ほどの、いわゆる新しく入った人が、新しくコミュニティに入っていくためのハードルみたいなものがあるかどうかという、そういう。私、実はここにきてまだ6年弱ぐらいで、私はもともと積極的な人間なので、ここに転入してからはすぐにいろんな形でコミュニティにかかわったり、今はちょうど下の娘が通っている学校のPTAの役員をずっとやらせていただいているんですけど、そんな形で、なるべく外に出てなるべく人とかかわって、なるべくいろんなところに出ようという感じでやってはいるんですが、やはりいろんな方がいらっしやいまして、そういうことがやっぱり気持ち的にできないという人もいらっしやると思うんですね。特に、実はここにコメントで書かせていただいたんですが、やっぱり弱者支援の観点から、例えば障害をお持ちのお子さんの親御さんだったりとかは、どうしてもひきこもりがちといいますか、通常の子育てしている方に比べるとさらに難しい状況だったりとか、なかなか外に出られないという方も結構いらっしやりまして、私も直接お話も聞きますので、できれば、もちろん積極的な人のところに積極的にかかわっていいと思うんですけども、そういう方々が、まだあんまりちょっと、前に出たくない人に対しても手を差し伸べたりとか、そういうインクルージョンとかよくいいですけども、そういった流れができていれば一番理想かなと個人的に思っているところでございます。

市長：ありがとうございます。

こうやって、積極的に加わっていただける方というのは非常にありがたいんですけど、まだまだその数というふうなのは、そんなに多くなくて、ですから積極的な人たちの輪というのがちょっとずつ広がって、参加していない方にリーチしていくとか、そういう形が必要ということですよ。

これは私たち行政も常にそうなんですけれども、こうやって参加していただいたり、何かに加わっていただいている方というのは顔も見えているし、あの人こうだなというのがわかるんですけども、わからない方という、何をお聞きしても答えないと、参加されないという方というのが、一番難しく、でもそこに実はすごく地域としての課題というか、個人に対しても非常に支援が必要だったりするケースというのが非常に多いなというふうに思っているんで、そういう意味では地域包括ケアシステム、ちょっと難しい話になりますけども、こういうのを進めていこうと、川田さん、地域の中で、居場所づくりだとか、カフェなんかを全国的に非常に注目されている取り組みをやっていただいているんですけど、今のコメントを聞いていかがですかね。

川田さん：そんなに有名だとは思いませんでした。

今日は、とても楽しみにしてきましたですね。というのは、今おっしゃった地域包括ケアシステム、本当に子どもから大人までという、自治会の中の方全てなんです。ですので、その取り組みというのは、行政だけでなく私たちも考えていかなきゃいけない。実際、自治会に入っていない方たちがたくさんいらっしやる中で、若い方たち、どんどん入ってきていますけれども、その方たちの居場所とか、受け皿を果たしてつくってきたのかなというふうに考えるとないような気がするんですね。だけど、若い人たちがこういうことをやりたいというのに触れたときに、一緒にやると本当に私たちがもう忘れていた、弱くなった知力とか気力とかそういうものに改めて触れるとすばらしいと思うんですね。こういう方たちがやっぱり一緒にやってくれることで地域が本当に活性化するんだろうなというふうに思っておりますので、このケアシステムの取り組みは、若い人たちの力添えが本当に必要なものだというふうに思っております。自治会・町内会としてもちょっと視点を変えて、またそういうふうに自治会とつながりを持ってこなかった方たちとつながるような取り組みも今後していかなきゃいけないと思いますので、ぜひ今日はいろんな意見を聞かせていただきたいと思います。

市長：ありがとうございます。平野さん、田中さん、田島さんはPTA。それこそおやじの会をやった、田中さんは、おやじの会ですか。

田中さん：稗原小学校のほうでおやじの会がありまして、そこに在籍しているんですけども、それと同時に、去年まで2年間、稗原小のほうでPTAの会長もやっています。

先ほど地域自治会に入られない方に関しても、お子さんが小学校に通っていれば、そこのおやじの会に入っていて、そのおやじの会で地域のイベントに参加したりとか。そういった、なかなかふだんお母さん方は地域との交流の場というのは子どもを通じて、あとは学校行事とかそういうのを通じて近所づき合いとか顔を広める機会があっても、お父さん方というのは、なかなかそういう場がないものですから。ですからお父さん同士の親睦を図る会というものをつくって、そんな堅苦しい会じゃないんですけど、暇なときに集まって、こういうことをやってみようかみたいな。来れる人が、できる人ができるときにできることをという気楽な考えで集まれば、横のつながりも増えますし、顔を出せる場も増えますし、地域のお祭りにもおやじの会として参加すれば、そこで地域の人との交流も深めることもできる。そういった会をどんどんつなげていく、広めていくべきかなって。

市長：そうですね。非常にいい御意見いただきまして。僕は犬蔵に住んでいまして、犬蔵のおやじの会というのを、本当に最近、活動出れてないんですけど入っています。田中さんがおっしゃったように、おやじの会という単位で、犬蔵町会のお祭りのところに参加して焼き鳥焼くよと。そうすると、自治会長さんとか会長さんとか役員の皆さんとかにも、ああこういう方が役員なんだみたいな話がわかって、いろんな話ができますよね。すごくそういう入り方ってすてきなという。僕も、あ、こういう入り方って自分自身も実感したんですけど、やっぱりそういうの出てきますよね、役員さんとの会話で。

田中さん：そうですね。僕は、実際そういうところに余り積極的に、鎌谷さんとは違って、余り僕は積極的に参加するタイプではなかったんですけど。生まれも育ちもこの稗原なんですけど、そこで生まれ育っている割には、そういうところに余り参加しないタイプだったんですけど。今隣に座っている田島さんに誘われて、PTAのおやじの会に入って。そういうのがきっかけで、こういう場にも顔を出したりとか、横のつながりも広まったりとか、人前でしゃべるようにもなったりとか。

市長：それはすばらしいですね。積極的に地域にかかわるタイプの人間ではなかったんですけども、こういう形で加わるようになってきて、今や積極的に。

田中さん：そうですね。頑張ってますけど。

市長：田島さん、キーマンがここにいらしたんですね。田島さん、お願いできますか、ちょっと。田島さんは、もともとすごく積極的なタイプですか。

田島さん：どうなんでしょうかね。菅生台自治会から参りました、田島と申します。

先ほど父の会のお話をさせてもらったんですけども、自分の子どもはかわいいというのは世間の常識だと思うんですけども。父の会に入る際に皆さんに自己紹介をしてもらうときに、自分の住んでいる自治会名と自分の子どものクラスと担任の名前を教えてくださいというふうに、まずむちゃ振りをするんです。そうすると、ほぼほぼ答えられません。ということは、若いお父さんの世代の人たちというのは、自分の子どもの

ために何かをしたいという気持ちがとても強いんですけども、意外と自分のクラスの、自分の子どもの学年はさすがに知っていますけども、クラスはわからない、担任の名前もわからない、自分がどこの自治会に所属しているのかというのわからないというのが現実なんです。まずは、そこからなんです。

おやじの会で、基本的にはおやじが楽しむというのが主なんですけれども、それに踏まえて自治会、あとは地域、こども文化センターのわかば祭のお祭りのお手伝いだったりとか、手つなぎまつりのお手伝いだったりとか、そういったことを通じて、先ほど市長がおっしゃってました自治会との連携というもの、自分の自治会がどこかというのを意識すれば、自分の自治会のお祭りとか、そういったところにも参加しやすくなるんじゃないかというのが狙いです。

うちの稗原小学校の父の会の毎年キャンプというのをやらせていただいていますけども。昨年第10回を記念させてやらせていただいたんですけども、大体350人ぐらいの参加者。昨年は区長も見学に来ていただいて、地域の消防、警察、昨年は10回記念ということで自衛隊も呼んで、小学校のグラウンドにパトカー、自衛隊、起震車、JAFの車も来たかな、そういったようなことをやらせてもらっています。

ここまで来るのには、非常に学校、地域、あとそういった協力ができないとできませんので、それをちゃんと協力を取りつけるための苦労はとてましたかと思えますけれども。それができて、多分今の自分も、小学校はかなりよくできて、よくコミュニケーションができていているというふうに考えています。こんなところですよ。

市長：いや、素晴らしいですね。もう拍手ですね。区長、見学されて、この地域とのつながり、父の会から始まったこの地域のつながり、ちょっとコメントを。

区長：その際は、お世話になりありがとうございました。

本当素晴らしい会で、10年間積み上げてきたということで、子どもたちが本当に生き生きと親たち、地域の方たちと交流して。お父さんだけではなくお母さんたちもたくさん手伝っていて、先生たちも手伝っていて。昼間もそうなんですけれど、プールに入ったり遊んだりして、夜体育館で泊まるんです、そこでのまた体験があったりということで、非常に可能性を私も感じたものですから、8月の全町連の学習会のときに、私もパネリストとして上げさせていただきましたが、あのときもおやじの会の可能性ということをちょっと紹介させていただきました。

実は、宮前区が日本の中でのおやじの会の発祥の地なんです。菅生中学校のおやじの会、実は私より何代か前の区長、大下区長、民間からなった区長さんが、おやじの会「いたか」という会の発起人で一番最初につくられた方なんです。

そのところの趣旨と、今の小学校での趣旨というのは違いますし、一時中学校でおやじの会がすごく盛んになったときは、生徒指導上の問題で子供たちがいろいろ生徒指導の問題を起こしたときに、父親の力を發揮してもらいたいということで始まっていったのが、中学校の場合なんです。それは今生徒指導も結構落ちついてきている中では、割と中学校のほうはそんなに活性化してないんですが、逆に今の稗原小のような形での小学校の父の会が増えてきている。実は、たしか富士見台小も今回できたんですよ。そうですね。それで、できるところから無理せずにとということで、私もどこかでちょっとそれ読んだんですが、そういった形も一つの集まりというのは、非常に可能性を秘めているなと感じているところです。

市長：ありがとうございます。今、10名の町会長さんいらっしゃいますけども、来ていただいています、自分のところの地元の小学校、中学校におやじの会あるよという方、どのぐらいいらっしゃいますか。5名、約半数ですね、6名ですね。原子会長のところもあるんですね。この町会とのつながりって、どういうふうにありますでしょうか。

原子さん：大塚町会の原子と申します。よろしくお願いします。

初めは見守りで始まったんです。小学生の登下校のときの見守りを始めまして、そこからお父さんたちが梶ヶ谷一丁目町会のPTAの会長さんが、何か声をかけ始めて。うちは宮前区と高津区のちょっと境なものですから、両方のお父さんたちがみんな集まって、じゃあ立ち上げようじゃないかということで、私どもの大塚町内会のイベントにもほとんど出てきてくれます。それで、その方たちと私ども町会と交流をしまして、今本当に広がっています。

小学生のお父さん、お母さん、それからまた中学生のお父さん、お母さんも含めまして、今稗原のほうの学校のことも聞きましたけど、まだまだ小さいですけど、いろんなイベントに参加していただきまして、お餅つき大会なんかすごいです。盆踊り大会なんかでもすごい出て、おやじの会で活動をしていただいております。

市長：ありがとうございます。おやじの会が、非常にこの地域の自治会・町内会の活動への参加だとか理解につながっているということを御紹介いただきましたけど。田島さんのやっただけで、自分の自治会・町内会はどこか、担任の先生は誰か、この問いはすばらしいですね。ぜひこの話は、いろんなところでこれからさせていただきたいと思います。ありがとうございます。

平野さんも地域活動、消防団にも入っていただいているというふうにお伺いしましたけども。

平野さん：野川から来ました、平野です。

自分自身、結婚して宮前区野川に移ってきたので、まだ住んで12年。当時会社勤めをしていたので、地域のことは一切何もやってなかったです。子どもも高津区の梶ヶ谷の保育園にいたので、宮前区野川に住んでいるんですけど、野川とはもう一切何のかかわりもなくずっと来ていまして、ちょうど5年前に独立して仕事を始めまして、地域の個人のお宅を回るので、その中でいろんな話を聞いていくうちに、何かしら地域のお手伝いをしなきゃいけないなと思って消防団に入ったんです。それが3年前。ちょうど同じタイミングで子供が小学校に入って1年生になって、その1年生の秋ぐらいに、どうしても人がいなくて、PTAの会長をやってくれないかと。学校入ったばかりで何も知らないし、何もやってないけど大丈夫でしょうかという中で、それでもいいというので、じゃあひとまずやってみましょうと。そこから社会福祉協議会だったり、地域の教育会議、避難所会議、声がかかるところは一通り出るようにして、今動いています。

野川小はおやじの会はないんです。去年もなかなか協力してくれる親御さんがいない。運動会、パトロールのボランティアなんかがあるんですけど、パパさんボランティアで、ほとんど返ってこないんです。唯一返ってきたのが、子ども会に所属していて、ちょっとお手伝いしてくれている5人ぐらいのお父さんと、あと野川は自主学童があるんですけど、そこのお父さんたちが10人ぐらい参加してくれまして。子ども会、自主学童の中でふだんから活動して、もう仲のいい人たちが手伝ってくれる。ただ、なかなかそこにたどり着くまでの壁が大きいんだろうと思って、一歩自分から入っていくのが。

今年の4月からですね、ちょっとおやじの会のようなものをつくらうと思っているんですけど。ただ、おやじの会として、多分役職があったり、係があったり、参加もちょっと半強制みたいになると、人が集まってこないだろうなというので。その三つをなくして、おやじの会という名前にはせずに、自分が中心になって情報の共有をするサークルみたいな、そういったものにして、例えば来月、第1週、第5週、どこが主催のこんなイベントがあるよ、こんな活動があるよ、そういうのを連絡して、もし時間があいていて、来たいなと思う人がいたら来てくださいという形で、消極的な参加者を増やしてとか。活動する中で少しずつ仲よくなって、地元という意識ができて、それぞれがもうちょっと何か、もうちょっと何かというので強まっていったらいいなというふうに考えております。

市長：なるほどですね。ありがとうございます。それぞれの地域の特性だとか課題だとかあってあるんですけど、平野さんのところはいろいろトライしてみたけども、なかなか組織化するのが非常に難しいから、まずは緩い形で人を集めていって、親睦からというか、やわらかい形から入っていこうじゃないかというふうな取り組みですね。ありがとうございます。

でも、こうやって努力していただいている方というのがいて、本当にうれしいなと思います。ありがとうございます。

いろんな方にいろんなお話を聞きたいんですけども、関口さんと峰野さんは、二人ともコネクトという活動をされておられる。御紹介も含めて、ちょっとしていただいてもよろしいですか。

関口さん：関口と申します。よろしく申し上げます。

その「ぐるっとみやまえ」という、皆様のお手元にあるパンフレットの中でも御紹介いただいているんですけども、コネクトという海外生活を経験したお母さんたちでできた、ちょっとしたグループを運営しております。

運営しているといつて大きなことは言えないんです。といいますのも、もともと富士見台小学校にあるたんぼぼの会という帰国子女のお母さんたちの自主的なグループがありまして、そこで知り合ったお母さんたちで、たんぼぼの会ではできないような、例えばお料理教室ですとか、いろんな先生を招いて講座を開くとか、そういったことをやりたいなというところで、自分たちがやりたいからちょっと集まってやってみたという感じで、すごく最初は気楽な会で始まったんですけども。何回か会を重ねていろいろやっていくうちに、全く違う小学校ですとか、帰国ではないけれども海外とかいろんなお料理、それから外国人との交流をしたいとか、そういういろんなニーズがある方が参加していただけるようになってきたんです。

また、富士見台小学校にはたんぼぼの会があり、あと宮前平中学校にはKS会とかという帰国子女のお母さんの会があるんですが、ほかの小学校にはなかなかないですとか、通っているお子さんがいる方はいいんですけども、そうでない方でそういう国際交流ができたり、海外の話聞けるような会がない。だからこういう会を探していたんだというような声も最近出てきまして。もしかしたら、ちょっと私たちがやっていることは、地域のいろんな人をつなげるような役目になるのではないかなということで、ちょっともう少し頑張ってみようかという感じでチラシをつくってみたりですとか、ホームページやフェイスブックなどというもので告知するように、最近なってきたところです。

市長：峰野さんもコメントいただいてもいいですか。

峰野さん：私も、やっぱり海外から宮前区を選んで引っ越してきました。今6年目ぐらいになるんですけど、あえてここを選んできたのは、やっぱり海外に住んでいた方の引っ越してきた方が多いというのがありますし、学校のほうもそういう受け入れがあるというような情報も聞いて、こちらに来たんですけども。

私の場合は、やっぱり子どもが小学校だったので、そういうコミュニティがたんぼぼの会であったり、コミュニティがあったんですけど、子どもがもし大きくなってきたときに、果たして自分の居場所がまずこの地域で見つかるのかなというのは、ちょっと思いました。

海外に住んでいた人と海外には行っていない人と、ちょっと何か壁があるといった、地域の人と壁があるというか、何となくそんなのを感じていて。こちらからもちょっと入りにくいし、やっぱり地域の方も話しかけづらいというか、何かコミュニティに入れづらいというか、何かそういう壁があるのかなってちょっと思ったんですけど。海外にいた人の経験って、何か皆さんが思っているよりもサバイバルな感じで、すごくいろんなことを経験していて、ちょっと泥臭いというか、おもしろいことが多いので、そういう経験を皆さ

んと共有する場所があって、これからオリンピックもあるので、そういう国際交流というか国際理解を深められるような会で人々をつなげられればいいかなという、コネクトという会がそういう名前なんですけれども、そういうことができればいいかなというふうには思っています。

市長：なるほど。ありがとうございます。最近これだけ多くの市民活動団体というか、団体登録していなくても自主的な任意の団体で動いておられるようなグループというのは、川崎市にもものすごく多くて。その意義を皆さんに伝えたい、いろんなイベントをやってみたいといっても、意外とそれ、なかなか情報発信も難しいとかというのがあるんですけど。それを幾つかの団体と一緒にやるとか、相乗りするとかというふうな形をやっていくと、意外と人が集まるというのもあって。

自分たち、ここは余り苦手なんだけど、ここと組み合わせると意外と広がったとか、活動範囲が広がったとか、人を呼ぶことがわかったとか。自治会・町内会にも呼びかけてとか、どこどこも呼びかけてみると、意外と話が広がっていったというような、国際交流だけじゃないですけども。そういう形の話がとても多いので、ぜひそういう意味で小学校区単位だけではない取り組みだと思いますので、そういう意味で少し宮前区とか、あるいはもう少し大きな広がりにつながっていただけると、非常に共通な課題だとか悩みを持っておられる、あるいは何かしたいと思っている方もいらっしゃるの、ぜひこれからもよろしくお願ひしたいと思っています。ありがとうございます。

それでは、ちょっとこちらのテーブル、秦野さんからちょっといただきたいと思いますけども。じもたんkidsという形で。

秦野さん：秦野と申します。本日、じもたんkidsの代表中田にかわりまして、参りました。じもたんkidsと言いますのは、宮前区を中心にお店や学校の先生、農家さんなどを子供たちが取材して、記事にして新聞を発行する活動をしております。子ども目線での地域のかかわり方ということから申し上げさせていただきたいと思ひます。

娘も二人とも富士見台小学校に通っているんですが、こちらの小学校を含めて近隣の小学校の子どもたちは、習い事ですとか塾ですね、含めてなかなか地域とかかわる機会が少ないと思ひております。受験される方も多くて、既にもう中学校の時点で外に出ていってしまつて、地元を根を張ることなく過ごしていく子どもが多いと感じております。そこで地元感を感じるにはどうしたらいいかというのが、大きな課題です。

じもたんkidsは地元の方々を中心に実際に会つて、お話を聞いて活動をしてあります。その中で大きな成果というのは、子どもたちがふだん会えない大人ですとか、地域の方々とは接することで、取材を終わった後に、こんにちは、小泉さん、加藤さんもそうなんですけど、加藤さんだ、小泉さんだというふうな声をかけられる関係がそこで生まれることが、一番大きな地域につながりだと思ひてあります。これは、まだ今すぐくまだ活動が狭いので、この活動をどう大きくしていつて、子どもたちがどう地域とかかわっていくかというのは、私達も今頑張つて目指して、どういう方向で行くかは考えているところです。

市長：なるほど。そうやって、それこそ人をつなげていただいているんですね、秦野さんの活動自身が。

秦野さん：そうですね。じもたんkidsで。

市長：じもたんkidsという形で、なるほど。いろんな取材だとかしていく過程で、いろんな人を知つてつながってくるという感じですね。

秦野さん：ことし5年目になるんですけど、毎年1年間で取材した方を冊子にまとめて、今富士見台小学

校、宮前平小学校、土橋小学校の全家庭に向けて、これを児童数配布しているんです。こういうことを、小さなことからなんですけどより多くの方に知っていただいて、仲間を増やすことで、そういうことも共有できると思いますので、続けていけたらと思います。

秦野さん：なるほど。秦野さんにお伺いしたいのは、子育て世代の人たちからもう少し上の世代とかですね、この世代というのではなくて、もう少し縦軸とか斜め軸だとかというふうなのを増やしていくという、つながりを増やしていくためには、どうすればいいですかね。

秦野さん：そこは難しいですね。やはり市長が冒頭におっしゃったように、私たちが20代で結婚を機にこちらに移ってまいりまして、まず年配の方と知り合う機会がないですね。やはりこの活動を通じて最近感じているのは、つながった方、農家さんでしたら、そのおじいちゃま、おばあちゃまがいらっしやったりとか、そういう縦でつながっていくことができると思っているんです。

ただ、なかなかその糸口が、入っていくところが少ないので、できれば地域のお祭りですとか、伝統的な行事、やはり閉ざされていると思っているんです。そういうところにもっと気軽に参加していく機会が増えれば、年配の方ともつながっていく機会が増えるのではないかと思います。

市長：そうですね。小泉さんも、伝統的な活動をもっと紹介したらいいんじゃないかというふうなのを、アンケートで書いていただきましたでしたっけ。

小泉さん：書いたかもしれないです。

市長： こういう、なかなか今、秦野さんが言われたように、ちょっと上の世代の方と接点をつくるのって、どうしたらいいのかなって。つくりたいんだけど、ちょっとうっという、ちょっとしたハードルなのか壁なのか。あれば、あるのかもしれないと思っている人たちというのが何となくあるというのは、僕も何となく気持ちとしてわかります。そういうところをつないでいる、リアルに今つないでいただいている一人として、ちょっとどうすればいいですかね。

小泉さん：何か僕は地元で祭り囃子みたいなやつですとか、あと子供のころからずっとやらされているんですけども。僕はやらされているというイメージなんですとかね。別の仲間なんかは、やらせてもらっているみたいなイメージで。毎週1回、木曜日とか土曜日とかの夜に太鼓の練習をガキのころやらされたんですけど、土曜日とか木曜日という、仮面ライダーをやっていたりとかテレビ番組がめじろ押しな日で、何で俺こんな太鼓たたきに行かなきゃいけないんだよみたいな、だからって。

今、それ大人になって、最近参加は余りできないんですけども、見ているとやっぱり後継者がいないと。後継者がいないんだったら、もっと町中に発信すればいいじゃないか。いや、そういうわけにいかない。そういうわけにいかないというのはどういう理由だと言ったら、昔から由緒正しいあれだからみたいな。要は、そこになっちゃうんですよね。自治会なんか、僕、消防とかに入れ入れと言われて、いや俺は入りたくないって言って。何でだっていったら、おまえらとつき合いたくないからだって答えたんですけど。

結局、地元にもともといる人間たちだけで盛り上がり、ほかの人たちが入る場所というのが見出せてないんじゃないかと。俺が入るんだったら、もっと俺の町中に広告をまけと言って、消防に入ってくれるお父さん、お兄さん募集しています、みたいな。さっきおやじの会さんみたいなところで言っていたみたいに、大体飲む店決まっているんだから、その店行けば、誰かしら消防員がいるから、僕らと一回話しましょうみたいな形がとれないのかなと思って。

やっぱり新しい人たちが入ってきて、僕たちの文化というのが薄まっていくというのが怖いって、前聞いたことがあるんですけど。いや、文化を変えていくんじゃなくて、文化をよくしていくんだよというのがある。前に、どんど焼きというイベントが僕らの村にもあったんですけど、老人ホームができて、できなくなったと。じゃあ別の場所でやっちゃおうぜとってやろうかといったときに、何人かが道祖神という神様の前でどんど焼きをやらないと、どんど焼きじゃないと。そんなんじゃないと、どんど焼きなんて、昔勝手に決めたんだ、誰かが火燃やして、団子燃やして食って、明けましておめでとって祝おうって、それでいいんだよとって。そういう仕組みを、これから先頑張ってください。

市長：いや、すごい。なかなか小泉さん、いつも言葉が強烈なんですけど、言っていること本当そうだなと思うことってたくさんあって。皆さん、どう思いますかね。川田さん、今、目を下げましたけど、どうですか。

川田さん：私よりも、もう少し地元でやってらっしゃる方、若い人たちに聞いてもらってください。

市長：ちょっと会長、いいですか。山田会長。

山田さん：ちょっと小泉博司さんが何て言うかなと思って、楽しみにしてきました。かなり強烈なことを言ったんだけど、私は一緒なんです。私は平日向自治会と言いまして、東名の向こう側の小泉農園があるところ、あの辺のヤマダ電機とか相鉄ローゼンがある、あの辺の自治会長をやっています。

今、冒頭市長から言われたように、いかに新しい人、若い人たちを自治会の中に引き込むかということで。今、ちょっとお祭りの話が出まして。私どものほうには、白幡八幡大神というのがありまして、そこはやっぱりお祭りが、結構市のほうでもホームページにも載ったりなんかしてますけど。確かに後継者がいないとかそういうのはあるんですけど、お祭りの場合は、白幡八幡大神というの自治会が主催しているのではなくて、やっぱりその地元の氏子というのがありまして。なかなかわかりにくいかもしれませんが、神社というのは氏子が構成しているんです。その氏子がお祭りを主催するものですから、そこに自治会がどうかかわるかということで、それで、今子ども会と太鼓部というのが私どもにあるんですけど。ちょっと話が長くなっちゃって申しわけないですけど。そこが地元のお祭りを盛り上げるために、おみこしだとか、それから今言ったお囃子の人たちがずっと町中を練り歩いて、お祭りを盛り上げる。その子ども会の人たちが、そこに行列をつくと、そこで各要所要所でジュースを配ったり、お菓子を配ったりということで自由に参加してもらおうということで、それはできるだけたくさんの人に子ども会の子どもたちに楽しんでもらうと。神社のほうに集まって、そこで相撲大会をやるとか、そういういろんな活動をしているんです。

ですから、ただやっぱり発信の仕方が、なかなかやっぱり難しいんです。だから今、小泉博司さんは、もっとうまく発信すればいいじゃないかと、チラシでも何でもまけばいいじゃないかということを行いましたけど。確かにそうなんですけど、そのやり方もただやみくもにまけばいいってものじゃ、金もかかるわけですから、なかなかその辺のところがあるんだろうと思います。だからその辺は、自治会長としても確かに意見としては、やっぱり参考になるんじゃないかなというふうに思います。

市長：一つそのお祭りにしても、神社の氏子さんたちの決まりごとと、それから自治会としての加わり方と、あるいは例えば中の太鼓部の中で子ども会を引き込んできたりというふうな、一つのお祭りというところにいろんな要素があって、それを役割分担だとか連携だとかということによって、うまいつながりというふうなのができる可能性というのは、もっと広がる可能性というのはたくさんあるということですよ。

山田さん：はい。ですから、その辺のところ、やっぱり氏子さんは氏子さんの考え方がありますし、自治会がそこにどれだけどういう形で協力していけるのかというところがありますので。その辺をうまくつなげていければ、もう少したくさんの人に参加もしてもらえらるだろうしということはあるんだろうと思います。

市長：ありがとうございます。趙さんは、グリーンバードに参加していただいているんですか。という形で合ってますか。グリーンバードは、皆さん御案内の…、先、活動を含めて紹介していただけますか。

趙さん：すみません。宮前平から来た趙と申します。私は韓国人で、日本に来てまだ4年しかたっていないので、日本語はまだ上手じゃないですけど、御理解お願いします。

グリーンバードって書いちゃったんですけど、正直言って、これ嫁さんが書いたもので、恥ずかしいです。今まで4回ぐらいしかまだ参加してないんですけど、個人的には会社人で、会社ではいろいろ活動は積極的にやっているんですけど。地域の市民の一人として、友達もいっぱい増やしたいし、地域のコミュニティもなるべく参加したいなという気持ちで、グリーンバードやいろんな友人から紹介して。今日もそうなんですけど、なるべく行って、いい情報を得ようとして考えていて。今日もいろんな情報を得て、すごくうれしいんですけど。例えば、紹介されたコネクトとか。子供は今二人で、富士見台に通っていますけど、おやじの会を今日初めて聞いていて、今日帰ってからちょっと調べてみようかなと思っけています。

時々区役所の前に、外国人向けのいろんなコミュニティが紹介されていて、すごく興味持って見えますけど、どっちかという主婦向けの、時間帯もどっちかという平日向けなので、ちょっと会社人として、ちょっと行きづらいなと思っけていることが若干あって、そこをもうちょっと。自分ももうちょっと頑張らなければならぬんですけど、ハードルをもうちょっと下げてほしいと思っけています。

すみません。ちょっとまだ日本語が……。

市長：いやいや、4年で驚異的な日本語ですね、すごいですね。おまけに地域のグリーンバードの活動にも参加していただいているということで、ありがとうございます。

趙さん：そうですね。もうちょっと頑張っけて……。

市長：グリーンバードって書いていただいた方、ほかにもいらっしやいますね。白土さん、グリーンバードの活動。

白土さん：宮前平三丁目から来ました、白土と申します。よろしくお願ひします。

グリーンバードは、実はそちらにお座りの加藤さんからお声かけいただきまして、もう1年ちょっとになるんでしょうか、参加させてもらっけてます。実は趙さん、私の妹の御主人。そういったつながりで、実は私自身がどういうタイプかという、すごくシャイという、余り人目に出たりとか、話したりとか積極的にコミュニケーションをとっけていけるかという、決してそういうわけでもなかつたんですけども、やっぱり何かきっかけがあっけて。

今回グリーンバード、実は加藤さんのお店が僕の家のおすぐ目の前にあっけて、僕がどこか出かけると必ず会っちゃうという、そういうシステムがありまして。グリーンバードどうだとか、あと色輪っかというの、川崎市の多摩川の河川敷でやるのも、その加藤さんのところにいらっしやった村瀬さんという方がいらっしやっけて、たまたまお見えになったんですけど、そこでお声かけいただき、参加したりとか。そういったことがなかつたら、逆にこういった会に出ることもひょつとしたらなかつたのかもしれないですけども。何かきっかけがあっけて、点と点がつながっけて線になっけていっけて、そういう感じですよ。

市長：なるほど。グリーンバードの活動というのを御存じない方もいらっしゃるかもしれませんので、グリーンバードの活動を、ちょっと簡単に御紹介いただけますか。

白土さん：基本的には、その地元別に分かれていて幾つかチームがあるんですけども。私が参加しているのは、宮前平チームのグリーンバードになりまして、駅周辺を去年までは主に重点的にやっていました。ただ、今、駅がいろいろ工事をやっていたりとか、交通の安全上のこととか配慮して、今ちょっと外れ、駅から坂を登っていく、区役所側ではないんですけども、反対側の坂道のほうを、みんなで大人も子どももまざるような感じでごみ拾いをして、最後記念撮影して、また来月頑張ろうというような感じで続けております。

市長：ありがとうございます。グリーンバードのチーム、宮前平にもあるんですけど、この前も小杉だとか、小杉でもグリーンバードでごみ拾いをしていただいている団体があるんですが。その会で申し上げたんですが、同じ武蔵小杉をいろんな団体でごみ拾いをしているんです。商店街の皆さんがごみ拾い、町内会の方がごみ拾い、グリーンバードの方がごみ拾いとかという、そのエリアマネジメントの方がごみ拾い、4団体ぐらいが武蔵小杉をやっているんです。時にはバッティングすると。

バッティングじゃなくて、時々一緒にやったらどうですかというふうな話をして、一緒にやって商店街の皆さんと顔の見える関係になると、あそこがいいお店あるらしい、飲み屋があるらしいというふうなのを知ってとか。町会の皆さんと一緒にやりましょうとかという合同チームでどうでしょうと、そうするとお互いのやっていることがだんだん見えてくるよねというふうな話で、それはそうだという話になって。いよいよ、じゃあこの日は統一日みたいな形で、今後そんなような話もしてみようかなみたいな話で、それぞれの団体がおっしゃっていたので。

何か自分たちの活動ということなんだけど、同じ地域の中で同じようなことをやっていたら、どうせだったらみんなでちょっと顔合わせしてみようかというふうな少し広がった展開というの、ぜひ宮前平チームにもお願いできれば、非常にありがたいかなと思います。

手塚さんは、アンケートに、市民活動があるのを余りよく知らないというふうにおっしゃっていただいておりますけど。

手塚さん：皆さん、すごいこの宮前区愛を感じるんですが。私が山梨出身で、いつか山梨に帰らなきゃいけないという頭があって、ここには多分ずっと住み続けたいと思うんです。ただ、このアンケートの中で、できるだけ長く住んでいくにはどうしたらいいかって、引っ越ししにくくするみたいなことが、何かちょっと思ったんです。

市長：帰らせないみたいな。

手塚さん：そうそう。1回入ったら、もう何かなるべく出ないみたいなぐらい、この地域を愛せるというか。でもそれって、例えば、私こういうふうにしたんですけど、新しく入ってくる人に、もっとようこそ宮前区へというウエルカム感があったり。あとは地域の連携というか、誰かとつながっちゃったら、出にくいんですよ。子どもの関係だったり、自分が誰かにつながっちゃったら、そこを出にくくなるので、そういうつながりももっと、今マンションいっぱい建っていますけど、それぞれがいっぱいちょっとつながっちゃったら、もうそのまま、いやもうずっとここにというふうになるのかなというふうには思いました。

市長：ありがとうございます。手塚さんを、じゃあ山梨に帰らせないような会に、地域にしていくというこ

とですね。

手塚さん：はい。

市長：どうしたらいいですかね。実はデータ上は、宮前区は転出される方というふうなのが非常に少ないという。若い世代で20代でどんと入ってきて、30代でもう定着している。40代になって、いろんな転勤だとかというので、少し出ていく。多少ですけども、転出超過になっているんです。ですけど、それ以降というのは、ほとんどが宮前区に残っていくというパターンになって。特に50代過ぎると、ほぼ定着ということになりますので。あと、まだ相当期間あると思いますが、このままずっと宮前のほうでというふうには。

手塚さん：思いたいですけど、来年引っ越しで。どうしようかなというふうに思っていたところなので、ちょっとここで情報をいっぱい知ったり、こんなつながりができたりすると、何か出にくいなとか、そんなふうにはなるかなと思いました。

市長：なるほど。いや、小森さん。いい話の流れだと思うんですけど。ずっと地元なんだけど、中抜けでしたっけ。

小森さん：中抜け15年しております。私が40代最後の年で、今日参加させていただいておりますが、この中で一番年長者だと思うんですけども。幼稚園から高校まで宮前区で教育を受けております。もれなく宮前区に1校しか高校ございませんので、おわかりになると思いますけども。かつ就職も、今、私働いているんですけども、ここから5分のところのイルカのマークのスイミングクラブで就職しております。あとは、宮前区地域教育会議の会計のほうもしております。もう地元どっぷり。中抜け15年しておりますけども、人生の7割を宮前区で過ごしております。もうほとんど宮前区に戻ってきて、つながりが切れてなかったというところが、一番本当にメリットがありまして、今の就職先も、やっぱりそのつながりで働いておりますので。もう本当に宮前区を何とかしたいなというのが、本当にあります。

今、そのスイミングクラブでも、宮前区応援プロジェクトというのをこれから立ち上げようとしております。現在もいろいろと地域貢献活動をさせていただいております。宮前区、川崎市から泳げない子をなくしたいプロジェクトです、そちらのほうにも参加させていただいております。あとは認知症カフェ、あとすすく土橋などの地域のボランティアのほうにスタッフのほうを派遣させていただいて、いろいろやっておりますので。これからも、どんどんそのパイプラインとして貢献できればとは思っております。

宮前区地域教育会議のほうに参加させていただいているのが、昨年からはなんですけども、そちらに入ったときに、8中学校区宮前区にあるんですけども、中学校区のおの活動はすごいことをやられているんですけども、なかなかそれがわからなかったというのが現状でございます。手探りしながら調べているんですけども、そういう情報発信が先ほどのお祭りの情報発信とか消防団の情報発信とか、PRがちょっと少ないのかなというのが、本当に実感しているところであります。

市長：なるほど。中抜けして、やっぱり宮前区に戻ってきたその最大の理由は、人との関係が切れていなかった、同級生だとか。どこが一番大きいですか、きずな的には。

小森さん：きずなは、小学校のときのきずなが一番大きいですね。いまだに同窓会をやれば、88人しか卒業してないんですけども、一番多いときで50人集まったりしておりますので。

市長：新住民の方が新しく入ってこられて、そしてちょっと抜けても、また戻ってくるというためには、どうしたらいいですかね。小森さんのようにずっと地元で育ったような方という方はいいんですけど、やっぱりこうやって新しく入ってこられる方、事情によって転勤とかで出られる。また、でも宮前区に戻ってくるためには、どうしたらいいですか。

小森さん：やはりコミュニケーションをとるということが大切なのは、皆さんおわかりになっていると思うんですけども。声かけ、挨拶運動じゃないですけども、小さなところからの声かけも必要なのかなと思います。

ただ、昨今SNSでいろいろな問題がありまして。先月も有馬中学校区の地域教育会議で、防犯の件で宮前区の警察の方に来ていただいたんですけども、知らない人に声をかけられたら、すぐ逃げろというような、今そういう状況になってしまっているそうなので。やはり小さなところからの声かけ、それがやはり自治会の方たちが、今本当にやってらっしゃることだと思うんですけども、みんなが、もう外に出て行って声をかけていく。自分たちは、危険な人じゃないんだよというようなアピールをするのも必要なんじゃないかな、この時代と思います。

市長：そうですね。本当に、今お勤めされているところも、非常に地域貢献活動で熱心に行っていて、そういう形で地元につながっていただくというのは、個人としてもそうですし、会社の法人としても、やっぱり地域につながっていただいているというのは、非常にありがたいですね。こういうのがどんどん広がっていくと、いいなと。手塚さんもまた戻って、ここから離れるのはやめようかなというふうに思っていただけのような地域になるんじゃないかなと思っております。

山本さんもどうですか。新しく来て、ずっと一連の聞いていただいて、少し地域のほうにさらに愛着が湧いてきましたでしょうか。

山本さん：そうですね。本当にいろんな世代の方が関心を持っているということがわかって、何かうれしいというか、そんなものながら、このまちっていいんだなというふうに思いました。

今日一日、話が地域ネットワークをつくっていききたい、つくするにはどうしたらいいかという話に終始していると思ってまして。市長も、そのための知恵をくださいという言葉だったと思うんですけども。私は、地域で働いている方はたくさんいらっしゃると思うので、いろんな会社の事例を受け入れるというのもいいかなと思ってます。

私が今働いている会社は結構規模が大きくて、国内外で買収を繰り返しているような会社で、新しい人がどんどん入ってきて、文化が定着しないということが課題になっています。そこで会社がやろうとしていることは、本当に小さなことなんですけれども、本社の情熱を持った一番のスキルを持った人間が支店であったり海外に行って、まずその支社とかの中で人をつなげる。飲み会をしてファシリテートをして、挨拶をさせてあげるとか。そこからワークショップなりをして、その支社の中で自治的な組織が生まれていく、それをつないで世界中で一つの大きな組織をつくっていかうみたいな動きがありまして。皆さん働いている会社ですとか、お勤めされているような会社の事例を市長に還元していくですとか、そういったこともできると思いますし、ほかの市街の取り組みというのを逆輸入していくと、もっと知恵を簡単にかりられるんじゃないかなと思ったりします。

市長：ありがとうございます。貴重ないい意見を言っていただきまして、ありがとうございました。

今冒頭にお話しした自治会・町内会の会長の皆さんですね、600を超える自治会・町内会が川崎市内にあるんですが、その方たち、町会長さんにアンケートをとりました。行政からの依頼事務、すごいたくさん、

もう数限りなくあるんですけども、それをやっているのは仕事量的にどうですかという、負担感が多い、あるいはやや負担感が多いという方というのは、相当な割合いらっしゃるんです。だけでも、そのことについてどうされますかといったら、続けていく。なぜですかというふうなことに對して、9割の方は社会的に責任があるからというふうに答えていただいているんです。

自分の自治会・町内会の会長の仕事って仕事ではないので、完全ボランティアで、日々毎日大変なんですけども。でも、このことが大変だと、大変なんだけども、最終的には自分たちの地域のために社会的に必要なだからやらなくてはいけないという、その使命感でやっぱりやっていただいている部分があるんです。ですけども、これだけに僕、行政をやっている人間としては、甘え切ってはいけないというふうには思っているんです。社会的に責任感しているから、だからずっとお願いしますと。けど、もう少しこの社会的に意義のある活動というのを、みんなで少し加わって参加することによって、もう少し違う形にできないかと。単純な負担軽減という形ではなくて、みんなが支え合って地域の中で暮らしていくということは、こういうことなんじゃないかということ、皆さんいろんな活動を通してやっていただいていることを、もう少しつながることで、よくスパイラルアップしていくことができないのかなというふうなことで。そういう思いがあって、皆さんの知恵ちょっとかしてくれませんかというふうな今日の会だったわけですけども。

今日も、私、本当にすごいたくさんの発見がありました。田中さんにおっしゃっていただいたような、もう既におやじの会の取り組みというのが、こんなにも広がり、半数以上の今、宮前区内の10人の中の6人はおやじの会とかかわりがあると。おやじの会ではなかったとしても、平野さんのように新しく組織を立ち上げようかと言っていたいただいている方もいますし。

田島さんのほうからは、最初自治会はどこですかというふうなことによって、地域性をまずみんなに認識してもらおうというふうな取り組みが始まっているというか、もう既に継続してずっとやってきていただいて、できてきているんだということに、とてもありがたいし、うれしいし、というふうな感じさせていただきました。こういうのを、もっとみんなで相乗りしていこう。知らなかったことが知ることによって、ここと連携すればもっとうまくできるんじゃないかとかということ、今日は本当に若い世代の皆さんに集まっていたいて、お知恵を拝借しましたけども、多世代の、いろんな世代の人たちとつながっていく、それなるべく冒頭の話で、小さな地域の単位でまざり合っていくと、つながりをつくっていくということが、いかに私たちの暮らしでの満足度を上げていくかということに直結しているんじゃないかなというふうに思います。アンケート調査、どこのアンケート調査でとっても、冒頭でお話したように、みんながつながる、支え合っていくということを実感していくことというのは、暮らしていくことの満足度につながっていくと頭ではわかっている、それをどうやってつながって広げていくかということだと思いますので。今日、本当にいろんな意見をいただいて、本当にありがとうございました。

ちょっと最後、時間も押してきているので、町会長さんのほうからコメントをちょっといただきたいんですが、庄司会長いいですか。ちょっと今日の一連の若い世代の皆さんのお話を聞いていただいて。

庄司さん：皆さん、長い間、時間を費やしていただいて、本当に私たちお年寄り軍団が、参考になったと思います。先ほど若い世代と言いますが、路線を交えた、川崎は本当に短いところをずっと入っていく。川崎区に行くには遠い、長い市ですよ。これについては、新しい方が会社から通勤してきて、じゃあこの宮前区に住んで、じゃあ子育てはどうしたらいいんだろうと、そういうことについても今勉強になりまして、自治会のほうもこれは協力していかなきゃいけないなということ、一つ感じました。

それと地元の方、これについては、この自治会もいろいろな会に出て、市長さんと交流機会を持っています。我々はそういうデータをとりながら、いろんな自治会・町会の組織をどのようにしていいかということも考えておりますので、まず地元の製品ができたなら外へ売り出しに出そうじゃないかって、そういうこともいいんじゃないかと思えます。いろいろあると思うんですけど。

海外の方、これについては、自分のところは集合住宅なんで、いろいろ今、事情がわからないんですけど、いろんな方が東南アジアから入ってきています。これについて、これからはその人たちを集めたいろんな言葉で、いろんなことをしながら、わからないことを模索しながら何かやる会をつくろうかなと、そう思いました。ということは、皆さんの力が、まだやることはあるんだということを、私はそう感じまして。

最後に、本当に花屋さんの加藤さん、山本さん、今日は青春ですよ。本当にそういう我々、40年ぐらい前の、そんなところあったなという思い出があふれてきました。やっぱりこういうところに参加して、いろいろ20代の方の話を、我々の孫になっちゃうんですけどね、そういう方と話をしたほうがいいんじゃないかな、そう思いました。

川崎市としても、市長さんもやはりいろいろなことを根本的な基礎から発展性のある宇宙まで考えていますから、そこを我々が一つでも小さいことでもいいですから協力できたらいいなと思っています。どうもありがとうございました。

市長：どうもありがとうございました。それぞれの会長さん方からコメントいただきたいところなんですけども、大分私の進行がよろしくないので時間になってしまいましたけども。今、庄司会長からお話いただいたように、いろんな外国の方とかも増えて、趙さんも4年前に来ていただいたということですけども、増えていて。また、コネクトさんの力がまた必要になってくる感じがします。こうやってみんないろんな形でつながっていくということが、単に課題を解決していく以上の楽しさだとか、それぞれのうれしさだとかって生活の質みたいなものにつながっていけば、手塚さんを含めて川崎市外、あるいは宮前区外に転出していかないということになると思います。

こういった誰にとっても、高齢者にとっても、若い、ここで子どもを初めて産んだとか、あるいは結婚して初めてこの宮前に来ましたよという人たちがウエルカムされて、ここでずっと続けたいなというふうに思えるようなまちづくりを、これからもいろんな人たちが連携をとってやっていくということがとても大事だというふうに思いますので。今日はいろんな話を聞かせていただいて、大変勉強になりました。ぜひ区長もそうですし、私たちもそうですし、市の職員もみんなとつながって、いいまちにしていけるように頑張っていきたいというふうに思っております。

本当に何か短いなというふうにもっともっと話を聞きたい、もっとディスカッションしたいという思いにさせていただきましたけども、引き続きぜひよろしくお願ひしたいと思います。本当に、今日はありがとうございました。

<閉会>

司会：皆様、ありがとうございました。まだまだお話ししたいところなのですが、お時間となりました。以上をもちまして、第34回区民車座集会を終了いたします。皆様、長い時間どうもありがとうございました。